

あなたのご家族（兄弟・姉妹・父母・祖父母）に八中の卒業生がいたら見せて下さい。

■ボランティア（支援の総称・人的支援）チャリティー（経済的支援・物的支援）とは

通常の経済活動は、需要側と供給側があり、需要側の要求（欲求や欲望に基づく）と供給側（生産・サービス）が相まった時、需要側は要求に準ずる経済的価値を得ます。一方供給側は、その対価として報酬を得ます。

しかし、ボランティア・チャリティーでは、報酬は戴くどころか、人的支援・物的支援・経済的支援を通じて、需要（欲求や欲望に基づく）の生じるレベル以前の不足の状況に対する支援を行うのです。ですので、基本は「無報酬」です。しかしこれは経済的報酬を指し、ボランティア・チャリティーでは、心的・精神的報酬があります。つまり「相手の喜びを感じる」「やりがい」「達成感」など。

つらい時代を知らない現代人

戦後の日本は敗戦により、とても貧しい生活を強いられました。人だけが多く、お金やモノが無いいわゆる貧乏な状況でした。そして顕著な苦勞は食料難でした。アメリカは肥料にすべく脱脂粉乳（牛乳でもなくミルクでもない独特なもの）をその栄養源として供給（子供は主に学校給食で）。更には過剰生産であった「パン」を供給しました。これでとりあえず飢えをしのがせた。（昭和天皇が自分は罪を受けても、国民が飢えないようマッカーサーに直訴し、それに応えた形となる）

この貧乏状況は、近所や親戚などがお互いに不足を補うべく環境にあり、需要や供給以前のボランティアをお互いにやっていた。またパンを普及させるために、米を食べると馬鹿になるとの広報も。

豊かになって

その後、朝鮮動乱（朝鮮半島の南：アメリカ・北：中国・ロシア）の際に、日本がアメリカの前線への補給基地となり、これを担った日本は経済的に活気づき高度成長の足掛かりとなった。

高度成長に向かい、貧乏を脱した日本は、高度に分業化された経済・社会構造により、農業70%の国がサラリーマン70%の国へと大きく変化した。今まで隣近所や親戚でしていた相互ボランティア生活は、独立生活を可能にした。更には大家族が分裂し、核家族という家族形態が増加した。

この核家族化は、大家族で1台のテレビ・洗濯機・冷蔵庫などが、各家族世帯ごとの需要となり、一挙に2倍・3倍の需要増が高度成長を押し上げた。（現在では核家族から更に単身世帯40%に）

薄れた感謝とおかげさま（喉元過ぎれば熱さ忘れる）

高度に分業化された社会では、その社会的恩恵が当然視され、誰の世話にならずとも一人で生きて行けるという錯覚に陥らせた。ボランティアを必要とする、「不足の供給」（（需要の供給ではない））ところに、その必要性は認知していても、それを行動に移す人はあまりにも少ない。災害時のボランティアでも、被害者側はボランティアが来てくれたら嬉しいのに、その逆では自分には行かない。

社会的恩恵を受けて現在があるのに、社会的貢献には無関心を決め込んでいる人が多く、「助けないけど、自分の時は助けて」と虫のいい人が多いのが現実。このような状況を見ると、経済的・物質的に恵まれた現代よりも、経済的・物質的に不足して貧乏していた頃が、懐かしいと思う人も多かろう。

海外ボランティア経験（今の日本人には分からない実情がある）

過去に、東南アジア9か国10か所に学校建設（主に校舎増築）をした経験がある。

・ネパール 自由市場に行ったら、学校の体操着（〇〇小・氏名）が売られていた。現地の人にせっかく送ったのに売ってるのかと聞いた。一人が2着・3着貰えば、1着は自分用、あとは生活のために売るんだと。つまり、それが貧困だと。（本当は売っている2着も自分が着たいが、家計の為）

・ベトナム 教育水準が高く、関心も高いと聞かされていた。しかし、経済的には当時まだまだで、1つの学校を午前は小学校・午後は中学校として使用していた。（不足に対する知恵と工夫）

・タイ 1か所では、新しい校舎の周りに子供を背負った少女がいた。学校に行きたくても通えない少女であった。（お金や家の手伝い）他ではやはり子供を背負った母親が5～6組位、校舎を取り囲んでいた。聞いたら、せめて支援した人たちが来るまで、出来上がった校舎を守りたいとのことだった。